

要点整理

文章表現に見られる特徴を問う設問。傍線部または文章全体に関して、修辞法やその効果、象徴的表現などについて問われる。その代表的な設問形式には次のようなものがある。

- ・本文の内容と表現の特徴についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。
- ・この文章において「……」はどのような役割を果たしているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

◎解法のポイント

- ① 表現の特徴として問われるものには次のようなものがある。
 - 視点に関するもの：一人称の「私」の視点・登場人物を超越した語り手の視点など
 - 比喩に関するもの：直喩・隠喩・擬人法など
 - 描写に関するもの：写實的・幻想的・即物的・感覺的など
 - 内容と関連するもの：内面描写・自然描写など
 - その他：長文または短文・会話文・方言など
- ② 表現の特徴は内容と密接な関係がある。小説は文体、さまざまな修辞法、象徴的表現などにより、その内容を豊かに表現している。右にあげた諸点をもとにどのような手法が用いられているのか判断する。
- ③ 選択肢を吟味する際は、指摘された特徴が正しいかどうか、本文中の具体的な記述に基づいて判断する。適否の判断のつかない特徴にはこだわらず、適否の明瞭な特徴に着眼するとよい。
- ④ 表現の特徴に関する問題として、本文で繰り返されるキーワードの役割（特に象徴的役割）を問う設問が出題されることもある。本文全体を、ポイントをおさえながら把握して、その語句が果たしている役割を把握する。表現の特徴を問う問題は、レベルが比較的高い。特に最後の設問として配置される場合は全文の内容をおさえる必要がある。修辞法に習熟し、筆者が何らかの意味を持たせている表現に着目して小説を読む訓練を積もう。

演習問題 A

次の文章は、三浦哲郎の小説『まばたき』の全文である。これを読んで、後の設問に答えよ。

旧友は、なにかひどく驚いたようなまろい目を天井へ向けたまま、荒い呼吸を繰り返していた。けれども、病室の天井はただ薄汚れているだけで、寝ている病人を驚かすものなどあるはずがない。

見ていると、旧友の目は、嵌め込まれたガラス玉のように全く動かなかった。じきに、その目がまるく見ひらかれていくだけで、実はなにも見てはいないのだとわかった。顔を寄せても、なんの反応もなかった。

「どうしたんだろう。」

「中りやんしてなす、テレビの相撲を観ているうちに。」

彼を呼びにきた旧友の細君がいった。彼の故郷であるこのあたりでは、中風のたぐいで倒れることをおしなべて「中る」といっている。そういえば、この男は高校のころ相撲部にいたな、と彼は思い出した。

「意識は戻ってないみたいですね。」

「いいえ。」と細君はかぶりを振った。「先生もそうおっしゃいますけれど、おらはなんぼか戻ってると思っております。」

それから細君は、ためにしに亭主へ声をかけてみてくれないかといった。彼は旧友の名を呼んでみた。すると、どういう刺激のせいなのか、旧友は、まばたきを一つした。たったいちどだけだったが、まるで音がするような強いまばたきであった。

15

細君は、胸の前で勢いよく両手を組み合わせ、狂喜の面持ちで彼を見た。
「ほれ、いま、まばたきしやんしたえ。これは、あんたさんのお声がわかったという証拠でやんす。父ちゃんは、目で返事したんでやんすよ。」

彼はもういちど旧友の名を呼んでみたい誘惑に駆られたが、細君を困惑させることになっては気の毒だと思って、よしにした。細君は、彼の声にわずかながら反応を示したこの機を逃すまいとするように、亭主の耳に口を寄せて熱心に語りかけていた。

20

ここは泌尿器科の病室で、入院が長引きそうなので空室の多いこの病棟へ移されたのだが、驚いたことに、偶然、隣室に高校時代の思い出話によく出てくる級友のひとりが虫垂炎をこじらせて入院していて、看護婦に確かめてから挨拶に伺ったついでに、こちらの様子を見て頂いた――そんなことを細君は話して聞かせてから、主人はあなたのお声を耳にしてさぞかし意外に思っていることでしょう、といった。

「意外なのは、こちらもおなじです。」

25

と彼はいった。
まさか、こんなところで、寝台の上に肥満した四肢を投げ出して仰臥したまま泥人形のように微動だにしない旧友と再会することになるとは思わなかったのだ。

「あんたさんも運の悪いこつてしたなあ。」

細君は、眉をひそめて気の毒そうに彼を見た。郷里を出て、もう三十年越し東京暮らしをしている彼が、たまたま休暇をとって帰省中に、しかも人里離れた鉱泉宿で発病してあやうく手遅れになりかけた不運を、口の軽い看護婦からも聞き出したのだらう。

30

「ひどい目に遭いました。いつ、なにが起こるか、わからんもんですな。」

POINT

読解のポイント

表現の特徴についての補足的説明

(1) 視点

- (a) 登場人物を超越した視点から物語が語られる場合、特定の人物（特に主人公）の立場・心情に即して描いているのか、人物を公平に描き分けているのか。

- (b) 一人称主語（「私」など）で語られる場合、自分の心理や相手の心理を分析的に描いているのか、出来事の推移を主に描き、心理は表面的に描くにとどめているのか。

この二つの観点からその特徴をつかむ。

(2) 描写

- (a) 「写實的」＝現実を美化、理想化せずにあのまに描写したさま。

- (b) 「幻想的」＝現実を離れた、夢、幻のような空想の世界のようであるさま。

- (c) 「即物的」＝主観を交えず、事物をそのものに即して描写しようとするさま。

- (d) 「感覺的」＝擬音語・擬態語・比喩などを用いて、五感に訴えるように描写するさま。

重要語句

◇かぶりを振る＝頭を横に振って否定する。「かぶり」は頭。

◇機を逃す＝機会を逃す。

◇仰臥＝仰向けに寝ること。

◇泥人形＝泥をこねてつくった人形。文中では、意識の戻らないまま物体のよう横たわっている旧友の様子をたとえている。

◇微動だにしない＝ごくわずかな動きもないこと。「だに」は古語の副助詞。

彼がそういったとき、不意に細君が小娘のような声を挙げて彼の寝衣の袖口を掴んだ。

「いま、ごらんになりゃんした？　また、父ちゃん。まばたきしゅんした。きつと、おら共の話を聞いてたんでやんしょう。それで、あんたさんの言葉に共感の合図を送ったんでやんす。」

そのまばたきを見損なった彼は、返事に窮して、枕の上の随分大きく見える旧友の赤ら顔を、黙って眺めた。相変わらず、ガラス玉のような目が飛び出しそうに天井を仰いだまま動かない。細君が我にかえって、掴んでいた彼の寝衣の袖口をどぎまぎと放したのをしおに、お大事に、と彼は頭を下げて旧友の病室を出た。

隣には、見舞客の気配もなく、時折、細君のぼやくような独り言と、医師や看護婦になにか訴えるような声が、壁越しに低くきこえるぐらいで、一日の大部分の時間は空室のようにひっそりとしていた。夜ふけには、単独の躰がきこえた。もはや旧友には昼夜の別がないのだから、躰は夜眠る習慣を守りつづけている細君のものだと思われた。この病院は完全看護なのだが、隣室では細君が泊り込みで病人に付き添っているらしい。

東京で暮らすようになってから、郷里とはすっかり疎遠になって、もはや呼吸とまばたきしなくなっている旧友のその後についても全く知るところがなかったのだが、耳ざとい看護婦によれば、旧友は長年教職にあって、いまは郷里と浜づきの小都市の教育委員会で主事を務めている由であった。

隣室の旧友を見舞ってから数日して、彼の主治医が退院の相談に病室まできてくれた。彼は、必要な話が済んでから、医師に旧友の容態について尋ねてみた。医師は、自分の担当ではないからと口籠りながら、手術さえ可能なら希望が持てるのだが、といった。

「患部がきわめて厄介なところにあるらしくてね。脳外科の連中も手を出したがりませんのです。」

「すると、彼はずっとあのままですか。」

「時々、まばたきをしますね。」

医師は目を伏せてうなずいた。
「奥さんがそれに希望を託してたな、意識のある証拠だといって。」

医師はしばらく黙っていたが、やがて、
「でも、それでいいのじゃないでしょうか。そう信じられて、希望が持てるんだったら。私たちはその希望をわざわざ打ち毀すようなことはしないのです。」

と顔を上げていった。

「図太、やがて」

退院の朝、彼は隣室へ別れをいいにいった。ところが、細君の姿は見えず、旧友だけが初めて見舞ったときとほとんどおなじ様子で病床にいた。彼は、戸口でちょっと躊躇ったが、無人にも等しい病室の素っ気なさ(なまけ)が彼を大胆にした。彼は、旧友の枕許までいくと、

「じゃ、お先にな。ねばれるだけ、ねばれよ。相撲の選手だったころみたいに。」

と盆のような顔を見下ろしていった。

すこし待ってみても、旧友はまばたきをしなかったが、気のせい(なまけ)か、その目がすこし潤んだように見えた。

細君は、売店へ買物にでもいったのかと思っていたら、そうではなかった。本館の玄関近くの、幅広い木の階段の太い手すりに手ぶらでもたれて、会計の窓口(なまけ)に群れる人々をぼんやり眺めていたのであった。彼は、一階の外來診察室にいる主治医に挨拶してから、玄関へ出てきて、それを見つけた。彼は、階段の脇から、手すりの細君を仰ぐようにして退院の挨拶をした。

細君は、エプロンを外してまるめただけで、急いで階段を降りてくるでもなかった。

「そんなところで、誰か探してらっしゃるんですか。」

「なんも。ただ退屈(なまけ)だったすけに。」

細君は、ちよつと首をすくめて、そういった。

彼は、土地の患者たちのように退院後の念押し通院ができないから、せめて三週間にいちどずつ帰郷して病院を訪れ、手術や治療のあとを点検して貰うことになっていた。その負担の大きい通院は、結局三度でおしまいになったが、その三度とも、彼は病院で旧友の細君を見かけた。

彼女は、依然として退屈(なまけ)を持て余しているらしく、いつも外來患者の雑踏を見下ろす階段の手すりにもたれていたが、見かけるたびに、前より全身にやつれ(なまけ)が目立つように思われた。髪や顔の手入れの仕方、衣服の色や柄の選び方、その着方も、どこか投げやりで、品位に欠けてくるように見えた。

主治医に、もういいでしょう、といわれた日、黙って別れるわけにもいかないような気がして、

「御主人、いかがです？」

と下から声をかけると、

「だんだんいいみたい、おらがそばにいてもいなくても。」

と細君はいつて、居酒屋の女のように自分の下手な冗談を大口で笑った。

「いまでも、時々まばたきをしますか？」

「する、する。ウインクみたいなやつを連発してる。」

彼は、そういつてわざとらしく笑い崩れる細君から目をそらすと、急ぎ足で玄関へ歩いた。

(注) 中風：脳出血などによって起こる半身不随、手足の麻痺などの症状をいう。「ちゅうふう」ともいう。

虫垂炎：盲腸のさきにある虫垂の炎症。盲腸炎ともいう。

問一——線①「細君を困惑させることになっては気の毒だと思って、よしにした」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 夫のまばたきに意識の回復の兆しをみようとすると細君を見ていると、動揺しているのはよくわかるのだが、そ

◇鉱泉＝鉱物質を多く含む温泉。

◇口の軽い＝「口が軽い」ともいう。物を言うのが軽率だ。秘密などを軽々しく他人に話す。対義語は「口が堅い」。

◇返事に窮する＝どう返答してよいかわからず、困る。

◇しお＝物事をするのにちょうどよい時。

「潮時」ともいう。

◇ぼやく＝ぶつぶつと不平を言う。

◇耳ざとい＝早耳である。

◇主事＝役所や学校などにおいて、中心となつてその事務を取り扱う役職の人。主任。

◇口籠る＝①言葉が口の中にこもりはつきりしない。②言葉がつかえてはつきりと言えない。

◇素っ気ない＝おもむき・おもしろみがない。一般に人の態度を表現し、「冷淡だ。おもいやりがない」の意で用いる。

◇理由説明を求める設問。「細君を困惑させること」とは具体的にどういうこと

る。

◇首をすくめる＝失敗や照れ隠しなどのために、首をひっこめる。

◇持て余す＝取り扱いや処置に困る。

◇投げやり＝物事をいい加減な態度で行うこと。

POINT

△理由説明を求める設問。「細君を困惑させること」とは具体的にどういうこと

とかを考える。

◇一縷^{いちろ}わずか。かすか。

◇水をさす^さうまくいつていることの邪魔をして不調にする。

△心情説明を求める設問。彼は細君がいないことで「大胆」になり、旧友に親しく話しかけている。

◇はばかり^{はばかり}①遠慮する。②はばをきかせる。

△心情説明を求める設問。「首をすくめる」しぐさの意味するところをおさえる。「退屈だった」という細君の言葉から、長引く看病生活で細君の意識に変化が生じた点を読み取る。

れを露骨に指摘しては、献身的に看病している細君に失礼だと思ったから。

イ 夫がまばたきをしたことに狂喜している細君を目の前にして、いまはともかく気が動転している彼女の気持ち

を落着かせることが先決で、むやみに刺激してはいけないと思ったから。

ウ 自分自身に言い聞かせるように、夫の復調への希望を主張する細君の前で、もう一度旧友の名を呼んで、その生死を確かめるのは、軽率な行為になってしまうと思ったから。

○エ 夫は偶然まばたきをしたのではなく、自分の意思によって反応したとみなして、そこに一縷の望みを託そうとする細君の気持ちに水をさしてはいけないと思ったから。

オ 自分を偽ってまで夫のまばたきに期待を託そうとする細君を見ると、何の反応もないとわかっていのに、旧友の名を呼んで細君を傷つけるわけにはいかないと考えたから。

問二 線②「無人にも等しい病室の素っ気なさ^{（イ）}が彼を大胆にした」とあるが、この場面における「彼」の心情の動きを説明したものとして最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア あれこれ話しかけてくる細君に注意を払わなくてもいいので気持ちが楽になり、寝台の上で微動だにしない旧友の姿を勇気をもって見極められるようになった。

イ 生きている人間の気配さえ消えた病室の中で二人きりになってみると、知らず知らずのうちにお互いが若かった頃のことか思い出され、少年の頃の遠慮のない率直な気持ちになった。

○ウ 静まりかえった病室の中で二人きりになったとき、はじめて、直に旧友と向き合い、誰にもはばかりに語りかけることができるようになった。

エ 生きているのかどうかも分からない旧友が病室の中にぼんと取り残されている姿を目の当たりにして、人間のはかない運命をたじろがずに受け入れられるようになった。

オ 意識を失って昏睡している旧友が横たわる病室の静けさに触れ、思い切って最期の別れを言うておかなければならぬのではないかと切迫した気持ちになった。

問三 線③「細君は、ちよつと首をすくめて、そういった」とあるが、ここでの「ちよつと首をすくめ」るようなしぐさには、細君のどのような気持ちが表れているか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

○ア 夫がなんとか回復してくれることを願いながらも、その一方では、夫に回復の見込みがないだろうという現実も認めている。しかし、看病生活が続くうちに張りつめた気持ちを失い、つい時間をもてあまして退屈している自分を照れくさそうに取りつくる気持ち。

イ 夫の旧友がわざわざ見舞いに来てくれたというのに、自分は、疲労が重なったこともあって退屈そうな素振りでぼんやりしてしまつた。そのことを申し訳なく思いながらも、どこか投げやりになってしまいたくなる気持ちをくんで欲しいと期待して媚びるような気持ち。

ウ 微動だにしないまま寝台に横たわる夫を間近に見ながら長い時間を過ごしていると、だんだん病状に対して悲

観的になるし、体力的にも辛い。だから、一人きりのときは出来るだけリラックスして元氣を取り戻そうとして

いる自分を理解して欲しいという親しげな気持ち。

エ 時間をもてあましながらかも、旧友に夫のことを相談しようと思つて、彼が玄関に出てくるのを待っていた。しかし、全身にやつれが目立っているし、髪や顔も手入れしないまま毎日過ごしているため、目の前まで降りて行つて挨拶をするのは、ばつが悪いという気持ち。

オ 看病生活が続いていくうちに、否定しきれない現実を思い知らされるようになり、退屈な時間を過ごしていた自分の姿を見られたことは恥ずかしい。だが、よそよそしい態度で見送るわけにもいかないので、かといつてわざわざ言い訳しに行くのも面倒だという気持ち。

問四 線④「彼は、そういつて……急ぎ足で玄関へ歩いた」とあるが、「彼」はどうして「目をそら」したのか。その理由の説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分の夫が死の危機に瀕しているというのに、下手な冗談を言いながら大口で笑っている細君が不謹慎に思え、細君に抗議の意思を伝えたかったから。

イ なかば諦めながらも精一杯の愛想をふりまく細君を見ると、彼女の役に立つどころか、励ましの言葉さえ十分にかけてやれない自分が情けなくなつてきたから。

ウ 医者から見放され絶望の淵に立たされているのに、まばたきをウインクなどと言って、逆にこちらを笑わせようとする細君の心遣いに胸を打たれたから。

エ 入院が長びきそうな病人を抱えて生活していく苦勞を思いやると同情を禁じ得ないが、自分もいつ同じ立場になるかわからないのだという不安にかられたから。

○オ 全身にやつれが目立ち、どこか品位を失いつつある細君がつくり笑する姿に、つらい人生の一断面を見るような思いがし、切なさ^{（イ）}にいたたまれなくなつたから。

問五 本文の内容と表現の特徴の説明として適当でないものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア「中りやんしてなす」「ただ退屈だったすけに」といった方言を使うことによって、旧友の妻のあたたかみのあ

る人柄を伝えると同時に、その土地に根づいた人間の姿を生活感豊かに表現している。

イ まばたきをウインクといつて冗談めかすようなユーモラスな表現を挿入することによって、厳しい現実に近い

つめられながらも、それを笑つてやり過ごそうとする妻のせつなさを、浮き彫りにしている。

ウ なんの反応もなく寝台に横たわる旧友を、「嵌め込まれたガラス玉のように」「泥人形のように」といった比喩を用いて描くことで、その痛ましい姿を直視しようとする「彼」の心理を表現している。

×エ 病院での単調な看病生活を続けながら、一貫して夫の回復を信じきっている旧友の妻の様子が、「彼」の治療期間中に鮮明な印象を残した体験として、写實的に描かれている。

オ 意識のない患者が反射的にまばたきをする可能性があることを知りながら、それをあえて妻に直接説明しない

医者を登場させることによって、作品の世界に奥行きを与えている。

◇ばつが悪い^{（イ）}決まりが悪い。具合が悪く恥ずかしい。「ばつ」は①話のつじつま、②その場の都合、具合。

△理由説明を求める設問。依然として退屈そうな細君を見て、「彼」はどのような印象を受けたか。そして「わざとらしく笑い崩れる」様子を見てどのように思ったのかということについて、この場面をもとに読み取る。

◇禁じ得ない^{（イ）}抑えることができない。

△内容と表現の特徴を問う設問。本文の描写のしかた、文体の特徴、表現技法などについておさえたうえで、各選択肢の内容を吟味する。

◇写實的^{（イ）}現実を美化、理想化せずにあるのままだに描写したさま。